

# 我れ、いまだ木鶏ならず



山田さん親子の作業風景。お米だけでなく会津の風土も含めて売るニュービジネスを考えている



山田 義人さん (49歳)

〒969-35  
福島県耶麻郡塩川町西鑑沼2039-1  
☎0241(27)2445

## ●プロフィール

有限会社やまだズ代表取締役。母親と後継者を含む一家4人で作る家族法人を経営。21haの稲作を中心とし、米の多元販売を心掛けると共に、山田氏個人の人柄を含めたやまだズの魅力を生く直売も手掛けている。「育み育まれ」を経営理念とし、地域の信望も厚いものがある。



山田さんはインターネット上に「私は、會津育ちのお米」というホームページを開いている

## 農業経営者ルポ 第25回

過去の歴史に仮定を持たずのは馬鹿げたことであるが、もし戦後に「農地解放」がなかったら、我が国は現在の朝鮮半島にある不幸を背負っていたのかもしれない。自作農化した農民の生産意欲の高まりが戦後の食糧難を解決させたのも事実である。そして今、農業界の衰退とは裏腹に農村や農家の暮らしは確実に豊かになった。

農地解放を別の視角から見れば、それは地主という名の農業経営者を農業から追放することだった。

それに代わって戦後の農業をリードしてきたのは官僚であり農協だった。

食糧増産の時代、窮乏の時代には農林官僚たちによる農業・農村改革政策は大きな成果を上げた。農協もまた、食糧需要の高まりを背景にした時代には自作農化した多くの農家の生産意欲を取りまとめ、いく機能を果たした。しかし、作れば売れる時代から米過剰の時代へ、そして我が国の社会が先進国型の発展を遂げて行くようになると、それまでの官僚によるリードや農協組織では有効な答えを出せなくなってきた。そして、今回の食糧庁が誘導したともいえる米価の急落は、これまでの米政策の失敗を農水省自らが追認することでもあったのだ。

戦後の農業政策の発端とも言える農地解放で合法的に土地を奪われた地主たち、とりわけ在村の地主やかつての自作農たちは、ただ排斥されるだけの存在であったのだろうか。彼らの、いわばオーナー経営者として農村の中で歴史的に果たしてきた役割、彼らが持っていた歴史と風土に根ざした農村・農業経営に対する



酒落たつくりのやまだズのオフィス兼倉庫

知恵や才覚、そして彼らの矜持あるいは自負を、我々は改めて評価してみる必要がないだろうか。

例によって前置が長くなったが、今回山田義人さんにこのルポにご登場願おうと思ったのは、山田さんが語る農業経営者の自負こそが、かつての地主たちの役割を受け継いでいくものだと考えるからだ。

## 山田家の人々

山田さんの経営する(有)やまだズは資本金900万円の家族法人である。代表取締役の山田さんと奥様の洋子さん(46歳)、後継者貴司君(24歳)の3人の取締役、それに法人に社員として入っている母上の登志美さん(70歳)を加えて4人で構成される。21ha(内自作地5・6ha)の稲作が経営の中心である。米は卸

小売店への出荷や企業との契約栽培の他、一部は消費者への直売もしている。高校卒業後、1年間のアメリカ留学も経験した貴司君は、経理・事務担当の洋子さんとともに山田さんの片腕となりつつある。

やまだズでは、応接コーナーと見学者などのための談話室までを持つ事務所を構えている反面で、乾燥調製施設は引退する農家から中古の乾燥機を譲り受け、それに各種の粉ハンドリング用機材を組み合わせることでライスセクターを組んでいくなど設備コストを下げる工夫もしており、戦略的な投資を行なっているようだ。

お邪魔したのは9月26日。第2回目の大阪取引市場入札結果の情報が入る時間だった。前週の東京入札同様、福島会津のコシヒカリの入札価格は他産地が軒並10%前後の値崩れをしているのに比べれば、2万431円、基準価格比でマイナス6%と比較的高い水準を維持したものの、やはり山田さんも顔は渋い。

山田さんは、少なく見積っても現在の15~25%位は収入が落ちていくと予測している。自分なりの経営戦略、販売戦略をどのように作れるかが経営存続の鍵だと考えている。そのポイントは販売の多元化である。また、直売については無原則な拡大は考えていない。単に米を売るのではなく、むしろ農産物・山田義人というブランド、農場を囲む景色や風土という存在を含めて、自分にしかないオリジナルな農業ビジネスを展開すべきだと考えている。

山田さんはインターネット上に自らのホームページ「私は、會津育ちのお米」(<http://www.akina.ne.jp/yamadazu/>)も開いている。インターネットで米を売ろうとしているのではない。農業経営者としての非農業者への情報発信であり、むしろその答えとして得られる異業種の人々の感性を受信することに価値を求めたことだ。

## 我れ、いまだ木鶏ならず

以前に会った時、農業経営者が生き残っていく時に地域の小規模農家に対してどのような「説得」をするかというような話題になったことがあった。その時、山田さんは言下にこう答えた。

「『説得』ではだめなんです。以前、お宅の雑誌の特集タイトルに書いていたでしょう。『夢の見方教えます』って。あれですよ。農業経営者たちはね、村の農家の人たちに向けて『夢の見方教えます』って言えなきゃ駄目なんだと思う。経営者自身が自分で夢を見ているだけじゃ駄目で、経営者たちが村の人々や農産物を買ってくれるお客さんに向かって夢の見える、多様な形で農業にかかわっていくことの価値を伝えなきゃ駄目なんだよね。農業経営者っていうのはそういう役割りを背負っているのだし、またそこに経営の可能性も見つけていくべきじゃないか」

そして今回、改めてその時のことを話す。「まだまだ自分はその域に達しているというのではないですよ。農業経営者

のあるべき姿として目指そうとしているんですよ」と山田さんは少し照臭さそうにした。でも「育み育まれ」を経営理念に掲げる山田さんの顔は真剣だった。そして、

「人は説得では動かないですよ。生きてきた人には、善し悪しは別にしてもその人なりのドラマがありプライドがある。そして誰でもそれを他人に認めて欲しいと思っている。押しつけても無理なんです。人は波動でもって感じ合うもの。説得しようと努力している内はまだ我々は本物ではないと思うのです。もちろん金勘定だけでもだめ。言葉以上のもので人々を納得させるだけの力が我々には必要なんです。私たちが果すべき仕事や夢を実現するために。ただ頑張っているだけでは駄目で、そんな人としての器を農業経営者たちは持たなければならぬのじゃないか。むしろ我々は『いまだ木鶏ならず』と自らを戒める時ではないかと思うのですよ」と話を継いだ。

「いまだ木鶏ならず」という言葉を、山田さんは「平成」の元号を考えたと伝えられる陽明学者・安岡正篤氏の本で学んだそう。

名横綱双葉山が自分の相撲界での位置について安岡正篤氏に打った電報の文句だそう。そしてこの言葉にはこんな故事があるという。

昔ある時、中国の君主が家臣に「絶対負けない闘鶏を育てろ」と命じた。その命を果すべく家臣は鶏を育て始めた。数ヶ月して君主が家臣の様子を聞くと、家臣は「まだ人を見ると挑みかかってくるような鶏しかできず充分ではありません

ん」と答えた。さらにその後、君主が様子を尋ねると、その家臣は「まだ、他の闘鶏がその鶏を見ると挑みかかってくるので本物ではありません」と答えた。やがて、その家臣は「やっとできました」と答えて木の鶏を君主の前に差し出した。その木鶏は身じろぎひとつしなないに他の鶏はそれに挑みかかろうとしない。他の鶏は喧嘩を望もうとしない。でも、その木鶏の存在に圧倒されている。

一代の名横綱双葉山は「いまだ木鶏ならず」と君主に答えた家臣の言葉を借りて「まだ自分の強さは本物ではない。そして自分は木鶏たることを目指したい」と安岡正篤氏に伝えたのだ。

山田さんは、農業も農業経営者自身も社会の中でこの木鶏のような存在になるべきであり、それを目指すべきだと考えている。

### 農業に新しい服を着せる

農業がこれまでの延長線上にあるものだけを追い求めている限り未来がないということ、もう誰の目にも明らかである。それは農業経営者からすれば「農業や農村はこうでなくてはいけない」という建前や常識論から自由になれることでもある。であればこそ、今こそ何のためらいもなく自由に振舞えばよいという考え方もある。しかし、山田さんはそれだけではいけないという。

経済や経営と言うのはお金の流れであり、血液の流れと同じなのだから、それを止めたら生きてはいけない。飯が喰えなければ何を言っても始まらない。困難

があっても経営を成り立たせていくために経営才覚を働かせるのは経営者としてあたりまえのこと。それを前提にして山田さんはこういう。

「どれほどの科学や技術が進もうと、農業が自然の摂理を学びながらする人の営みであるという原則は変わりようがない。現代の右往左往の後に人の世の形は新しい装いで自然の摂理に立ち戻っていくのだ。今、日本の農業界はその生みの苦しみの中にあるのであって、農業経営者たちはそんなに悲観する必要もないし、道を見失うべきではない。知識だけではできない自然の摂理に従いながらする農業という仕事に携わって、そこから学ぶことができるのだから。農業経営者たちはむしろ今こそ人格を高め、人が生きるための、そして人として成功するための原理原則を学ぶ時、それを我々は試されているのではないか」

先進国である日本であればこそ、農業を単なる作物生産業としてのみとらえるのではなく、自然と人の社会の間に立つて生産し、循環の中で自然を利用しつつ人を癒していく、そんな新しいビジネスとしてとらえていく必要があるという。そして、

「今回の米作り農家に降り掛かっている嵐は、新しいものを創造するために、既存の弊害を取り除いて行くためのステップであると考えべきである」と。

さらに山田さんは、

「いくら弊害を取り除くといっても失ってはならないものはある。成功するための原理原則とは、人間が生きていくための原理原則として語られてきたことを守

り受け継ぐことではないか。ならばその哲学だけは失ってはならない。それをわかまえないながら、その哲学を継承するためにこそ、今は農業に新しい服を着替えるさせていかねばならない時なのだ。原理原則にどんな服を着せるかは、その時代背景によつて変えていく必要があるのだらう。でも、何時の時代でも肝心なのはあくまで原理原則なのであり、服の流行に惑わされてはいけないのだ」といった。

### 農地を預かる者の自負

地主制度が批判され民主的といわれる農業政策や農民運動の思想が強調されるあまり、かつて地主や村の長たりえる自作農の「農地を預かる者」としての自負心によつて支えられていたもの、そして彼らの「農村経営者」としての能力と果たしていた社会的役割の大きさに、我々は注目してこなかった。

これまでの政府管理型の社会主義的農業政策の中では、農業者を「農業就業者」という「労働力」としてみずただで、彼らを村にいて自らの田畑や地域の風土の上に立つ、真に農業の「経営主体」として擁護しようとはしてこなかった。耕す他になす術を知らぬ弱者力なく貧しき「農民」として、その救済や保護は行なっても、競争社会の中で経済的に自立することはもとより、自らの責務を自覚した誇りある道を創造し続ける農業経営者たちに十分な活躍の場が与えられてこなかった。それが現代の我が国の農業の混乱の一つの原因なのではないだろうか。

しかし、かつての地主たちが背負ってきた精神と能力は、現代の農業経営者のなかに確実に受け継がれている。

彼らの多くは小規模地主から土地を借りて経営する小作者の立場にいる。そして彼らは、単なる「生産者」としてだけではなく新時代の「農業経営者」として経営手腕を発揮し始めている。

合理的な思考力を持ちつつも、ただ「良い作（一時の儲け）を求めて土を肥やすことに専心しているだけではない。常に新たな農地を拓き美田に変えていくこと（社会的な経営基盤の整備を含めて）を己れの役割として自覚し、”作”はその結果と考えることのできる人々なのである。まさに地域社会や顧客としての消費者への啓蒙や営業を含めて未来のために土を作り、美田を作る意志、開拓の志を持ち、そしてその事業をなす者としての誇りのために生きようとしているのだ。」

（昆 吉則）



乾燥調製施設は全て地域の中古品を組み合わせてシステム化している